

原 著

## 岡山市における生涯音楽学習に関する調査研究

### —公民館における学習を中心に—

新谷 明子 ((株) トンボ) 奥 忍 (岡山大学教育学部)

生涯学習の場で理想とされる「すべての人に満足いく学習づくり」に向けて、本稿では音楽学習が盛んに行われている岡山市の公民館に焦点を当て、実態調査によって問題点を明らかにすることを目的とする。公民館の音楽学習の特徴を浮かび上がらせるために、インタビューや意識調査を行い、その結果を民間学習機関、個人教授所、大学サークルと比較する。

調査の結果、公民館における生涯学習の可能性についての問題点として以下の3点が明らかになった。

- ・公民館における音楽学習のリピーターが多く、他の学習形態・機関からの新入が少ないこと。
- ・若い世代にとって公民館が学習の継続のための対象機関として認識されていないこと。
- ・音楽用の防音設備と適切なスペースの確保

キーワード：生涯音楽学習、公民館、岡山市、個人教授所、大学サークル

#### I. はじめに

本稿は、岡山市における生涯音楽学習の実態と特徴について明らかにすることを目的とする。

まず、生涯学習の諸施設を概観した上で、他の施設と比較して音楽学習がもっとも盛んに行われている公民館に焦点を当てる。岡山市立公民館の主催講座とクラブ講座について調査し、民間カルチャーセンターである山陽新聞カルチャープラザと比較してその傾向を明らかにする。さらに、岡山市立公民館の中でも最も講座数が多く、音楽クラブ講座のジャンルも豊富な岡山市立京山公民館をとりあげ、そこでの活動について考察する。なお、学習者の側から見た公民館での音楽学習活動の問題を浮上させるために、大学サークルと個人教授所における学習者を含めてアンケートを行う。

#### II. 生涯音楽学習のための施設

生涯学習を支援するための施設は種々である。それらは社会教育施設や社会教育関連施設、生涯学習施設、生涯学習関連施設など様々に分類がされている。しかし、社会教育関連施設や生涯学習関連施設というカテゴリーは、あくまでも便宜的なものであり、はっきりとした定義や境界は存在しない。

これらの施設では、地域住民の生きがいづくり、

仲間づくり、地域づくり等の自主的、自発的な学習が支援されている。鈴木・守井による生涯学習のための施設4種の中から音楽学習が行われている施設を抽出して表1に示す。これらの施設の中で生涯音楽学習のためにもっともよく利用されている施設が公民館である。公民館では、学習機会の提供や情報の収集、提供、相談、アドバイスなどを通じて、知識、教養に終わらない学習活動や豊かな関係づくりが支援されている。

表1 生涯音楽学習のための施設<sup>1)</sup>

施設分類	施設例
社会教育施設	公民館、生涯学習センター、青少年教育施設(少年自然の家、青年の家、児童文化センター等)、女性関連施設(婦人会館や女性センター等)
社会教育関連施設	地方自治のための集会所(コミュニティセンター)
生涯学習施設	学校、民間教育施設(カルチャーセンター)
生涯学習関連施設	個人教授所(習い事)

#### III. 岡山市の公民館における音楽関係講座

岡山市立公民館は中学校区ごとに整備されており、岡山市の生涯学習施設の中で最も数が多い。全体で、中央公民館1館、地区公民館33館、合計34館である。公民館では様々な主催講座やクラブ

講座が開かれている。主催講座は公民館が利用者の声や要求に応じて講座を企画実施するもので、クラブ講座は10人以上が集まって自主的に企画運営する講座である。

この項では、岡山市立公民館全34館における講座について公民館のパンフレットと岡山市のホームページの掲載記事を基に整理する<sup>11)</sup>。

まず講座全体は「子育て・教育」「人間と社会」「自然科学」「産業・技術」「芸術・文化」「スポーツ・レクリエーション」「生活・健康・福祉」「趣味・娯楽」「国際理解」「環境問題」「女性・男女共同参画・ジェンダー」「その他」の12項目に分類される。図1は項目別の講座数の比率を表している。なお、音楽・美術など芸術は一般に「趣味」に含まれることが多い。しかし、本稿では「音楽」に焦点を当てているので「芸術・文化」として項目をたてている。「趣味」には「囲碁・将棋」「ファッション・ネイル、アロマ」などを含めた。講座の中には複数の領域にわたるものが見られる。このような場合には該当項目の中に0.5に換算して含めた。また、3種類以上の領域にわたる講座の場合には、その中で中心的な2項目に0.5ずつ換算して含めている。たとえば、「男の料理教室」は「男女共同参画・ジェンダー」と「生活・健康・福祉」に0.5として含め、「子どものリズム体操」は「子育て・教育」「芸術・文化、スポーツ・レクリエーション」の双方に分けた。

その結果、岡山市立公民館の場合には「芸術・文化」が全体の過半数近くを占めていることが判明した。次いで多いのが「スポーツ・レクリエーション」「生活・健康・福祉」である。傾向としては高齢化社会に対し、高齢者対象の講座や健康に関する講座が多くみられる一方で、子ども対象の講座が少ない。

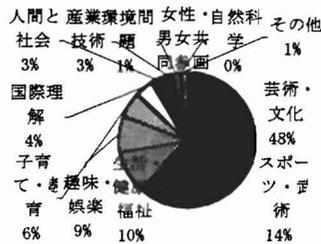


図1 岡山市立全公民館における生涯学習の分類

次に、最も多かった「芸術・文化」について「美術・工芸」「茶道・華道」「書道・ペン習字」「芸能・

音楽」「舞踊」「文学・文芸」「映像・写真」「演劇」の8細目に分類して、講座数の比率を見た(図2)。すると、「美術・工芸」が最も多く、次いで「芸能・音楽」が多いことが判明した。この2細目だけで全体の60%を占めている。「美術・工芸」「芸能・音楽」の講座はどの公民館でも開設され、参加人数も多いことから、学習ニーズも高いとみられる。

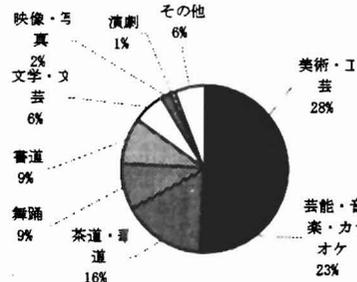


図2 岡山市立公民館の「芸術・文化」の内訳

図3は「芸術・文化」からさらに、音楽に関係している「芸能・音楽」を取り出して示したものである。また、「芸能・音楽」を楽器別に示したものが、図4である。

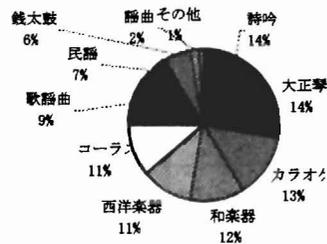


図3 岡山市立公民館の「芸能・音楽」

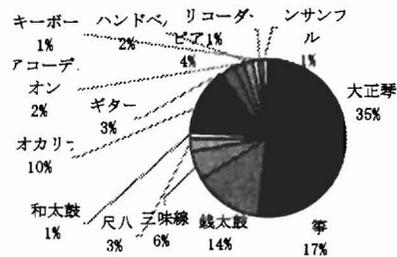


図4 岡山市立公民館の「芸能・音楽」の楽器

図3から、「詩吟」「大正琴」「カラオケ」「和楽器」「西洋楽器」「コーラス」の講座数がほぼ同数であることがわかる。また、「詩吟」「和楽器」を日本音楽、「西洋楽器」「コーラス」を西洋音楽、「大正琴」「カラオケ」を折衷音楽<sup>11)</sup>の3種の音楽ジャンルに分類すると、ほぼ3等分されていることがわかる。

図3の中で、楽器を使った講座、特に「和楽器」「西洋楽器」の内訳が示されている図4をみると、「大正琴」が一番高い比率である。和楽器では「箏」が最も多い比率である。一方「和太鼓」「尺八」が少ない。

「和太鼓」が少ない理由として、このジャンルは神社など生涯学習関連機関で行われていることが考えられる。「尺八」については音が出るまでに時間がかかること、さらに「箏」が生涯学習に積極的に参加している女性の楽器として把握されているのに対して「尺八」はどちらかといえば男性の楽器としてとらえられていることが原因として考えられる。

西洋楽器をみると「オカリナ」が最も高い比率であった。「オカリナ」以外の楽器は低い比率である。この原因としては、講座が多様な楽器に分かれていることが挙げられるかもしれない。背景には、学習者に色々な楽器をやりたいというニーズがあるだろうと推測できる。

以上述べた傾向は 2000 年度に田邊美佳によって行われた調査結果と共通している<sup>4)</sup>。このことから本調査の結果は近年の岡山市の傾向としてとらえることができるだろう。

### Ⅲ. 民間カルチャーセンターとの比較

ここでは、岡山市立公民館の開設講座を民間の学習施設である山陽新聞カルチャープラザの講座と比較し、その傾向を考察したい。

山陽新聞カルチャープラザは、山陽新聞社本社ビル内の「本部教室」を始めとし、岡山市と総社市に「岡山天満屋・総社教室」「岡南教室」、倉敷市に「倉敷教室」「倉敷チボリ教室」「倉敷中庄教室」、笠岡市に「児島・笠岡健康教室」が開設されている。これらの教室にはそれぞれ「文学のコース」「語学のコース」「ライセンス取得のコース」「美術のコース」「音楽のコース」「茶道・礼法マナーのコース」「趣味・手芸のコース」「スポーツのコース」「ジュニアコース」など 17 コースが用意されている。本調査では、山陽新聞カルチャープラザの 9 教室のうち岡山市にある「本部教室」「岡山天満屋」「岡南教室」の講座を対象とする。図8には講座全体の分類比率を示している。

講座の中で最も比率が高い分野は岡山市立公民館と同様に「芸術・文化」である。岡山市立公民館と大きく異なるのは、「趣味・娯楽」「スポ

ーツ・武術」の比率が高く、特に「趣味・娯楽」は「芸術・文化」に続いて2番目に多い比率となっている。カルチャープラザでは趣味のコースが2コース開設されており、「趣味・娯楽」重視の傾向があるのかもしれない。

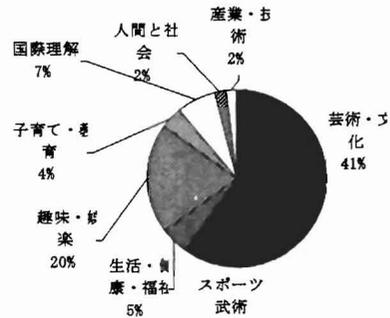


図8 山陽新聞カルチャープラザの生涯学習講座

図9には山陽新聞カルチャープラザの「芸術・文化」の内訳を示す。

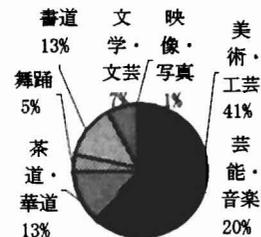


図9 山陽新聞カルチャープラザの「芸術・文化」

芸術・文化の中で最も比率が高いのは岡山市立公民館と同様に「美術・工芸」である。岡山市立公民館と異なるのは、「美術・工芸」「書道」の比率が高く、「芸能・音楽」の比率が低い点である。「芸能・音楽」については楽器の種類は多いものの、講座数は公民館と比べてかなり少ない。

山陽新聞カルチャープラザの「芸能・音楽」の内訳を図10に示す。「芸能・音楽」の内訳は岡山市立公民館とかなり傾向が異なっている。たとえば、山陽新聞カルチャープラザで最も比率が高かったのは「西洋楽器」である。それに対して岡山市立公民館で1番高い比率であった「大正琴」は2番目である。とはいうものの、岡山市立公民館より比率は比較的増加している。また、岡山市立公民館において「大正琴」と同じ比率であった「詩吟」はカルチャープラザではかなり低いことが注目される。「コーラス」についても岡山市立公民館に比べ9%の減少である。山陽新聞カルチャー

ラザでは歌唱の講座が少ない一方で、器楽の講座は種類も講座数も多い。言い換えれば、歌唱関係の講座開設比率が岡山市立公民館とは異なった傾向を示している。

図 10 では楽器関係の講座が多く見られる。しかし、種類は多いものの一つの楽器に対する講座数が少ない。「和楽器」「西洋楽器」の内訳を示した図 11 を見ると、最も多かった楽器は岡山市立公民館と同様に「大正琴」である。「和楽器」は「芸能・音楽」の中で 14%を占めている、しかし、「西洋音楽」は 30%で最である。楽器種としては、岡山市立公民館ではあまり開講されていなかった「ピアノ」や「ギター」の講座が多かった。特に「ピアノ」は「大正琴」の次に高い比率を占めている。また、岡山市立公民館では西洋楽器の中で最も多い比率であった「オカリナ」はあまり開講されていない。

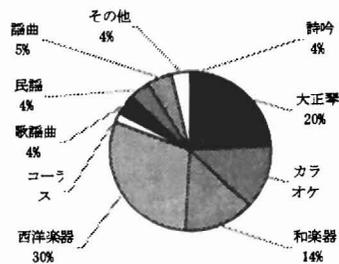


図 10 山陽新聞カルチャープラザの「芸能・音楽」講座

これらの点から、岡山市立公民館では自分で買うことができる楽器や持ち運びができる楽器が好まれて開講されているのに対し、山陽新聞カルチャープラザではピアノのような大きな楽器を設備し、高価な楽器のジャンルも開講できていることが両施設の相違点といえよう。

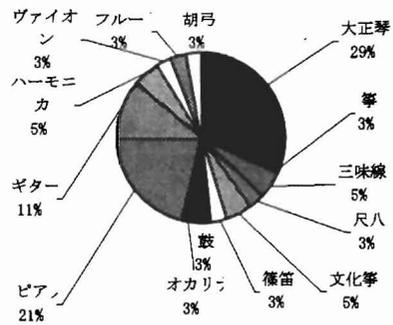


図 11 山陽新聞カルチャープラザ 楽器別

以上述べた他にも、山陽新聞カルチャープラザの講座には次の 2 つの特徴がある。第 1 点はレベル別の講座の開設である。音楽や美術、語学、スポーツなどの講座では「初心者、入門編」「研究科」「中高年、大人対象」「個人レッスン」などレベル別に講座を行うことで、初心者にも経験者にも対応できるようになっている。公民館の音楽学習では、Ⅲで述べるように、レベルについての課題が多い。レベルの異なった受講者に対応する方策として、山陽新聞カルチャープラザの方法を検討することが必要ではないだろうか。

山陽新聞カルチャープラザの特徴の第 2 点はジュニアコースの開設である。子ども向けの講座は公民館では希である。学校教育では「音楽」の授業時数が徐々に削減されている。公民館が授業時数の削減を補完する役割を担うことができるのではないだろうか。

### Ⅲ. 事例研究—岡山市立京山公民館の場合—

岡山市立京山公民館<sup>7)</sup>では全体で 134 講座が開設されている。その中で芸術・文化関係は表 3 の通りである。これらの講座の観察した上で講師に対してインタビューを行った。ここでは観察とインタビューを基に、同種の講座の持つ課題について考察したい。

表 2 岡山市立京山公民館のクラブ講座「芸術・文化」の内訳

種別	美術・工芸	芸能・音楽	茶道・華道	舞踊	書道	文学・文芸	映像・写真	演劇	合計
講座数	13	11.5	10	3	5	4	0	0	46.5

表3 岡山市立京山公民館の音楽クラブ講座一覧

ジャンル	講座名	備考
日本音楽	輝洋秀会	民謡と三味線の講座。昼と夜の講座開設
	箏曲クラブ	
西洋音楽	オカリナクラブ	音楽のボランティア活動。芸能・音楽と生活・健康・福祉で0.に換算。
	ピーチ・アンサンブル	
折衷音楽	たのしい大正琴	
歌 唱	かんたん詩吟健康クラブ	昼と夜の講座開設
	コール・ココ	女声合唱。
	四季をうたう会	混声合唱
	カラオケ歌謡教室虹の会	
	京山カラオケ同好クラブ	講師なしのクラブ講座である。

## 1) 輝洋秀会 (三味線)

この講座に限らず、弦楽器関係の講座に共通する最大の課題は調弦である。この講座では一人ずつの音を講師が確認していたため、時間がかかっていた。三味線の場合、事前に調弦の印をつけることはできないので、受講者が調弦できる力をつける必要を感じた。まずはチューナー等の機械を使う調弦から始めて、最終的には耳で聞いて調弦できるようにしていく方法が考えられる。各自が調弦できれば、そのための時間が短縮できて稽古時間の増加につながる。また、三味線は弾く前に弦を伸ばしておかないと弾いている途中で音が下がってしまったり、弦が切れてしまったりすることが多い。多人数による三味線講座に共通した課題であると考えられる。

この講座では、異なったレベルの受講者への対応として、まず初心者が3～4人のグループでお稽古し、その後で全員でお稽古するという方法をとられていた。このことが各自にあった進捗で練習することを可能にしている。しかし、一方では、個別に別の唄を稽古しているために全員が十分に稽古する時間をとることは難しいようである。

## 2) 箏曲クラブ

三味線と同じ弦楽器であっても、箏の講座の場合の最大の課題は楽器数とスペースの関係である。まず楽器が受講者よりも少ないと全員にわたらない。そのために時間のロスが出る可能性がある。全員が出席することを前提として考えた場合には、必要数の楽器の購入、借用費用やメンテナンスの問題がある。

箏のように大型の楽器の場合、全員が弾くことができるスペースの問題は大きい。観察した講座では、スペースにゆとりがあり、講師の目の届く範囲で楽器を並べられていた。しかし、全員が出席した場合

には、楽器数とスペースに問題が生じるのではないだろうか。受講者が満足でき、効果的な学習を可能にするためにはこれらの点の解決が必要と考えられる。

異なったレベルへの対応としては、一箏と二箏のパート分けがなされていた。このことによって初心者は主旋律が多く、メロディの分かりやすい一箏を弾き、継続歴が長い人は手数が多く、難しい二箏を弾くことができる。このような工夫は初心者も継続歴の長い人も共に合奏を楽しむことができるので、効果的な学習方法であると考えられる。

## 3) オカリナクラブ

異なったレベルへの対応として、受講者を進度別に明確に分けていたのがこの講座である。講座前に初心者向けの入門編を行うことによって、初心者が講座に早く追いつくことができるよう工夫がされている。生涯音楽学習では一つの講座内に初心者と経験者が参加することが多いのではないだろうか。そのような場合には、照準とすべきレベルが重要な問題となる。この講座のように進度別講座にすることも一つの解決方法と考えられる。

公民館の音楽クラブ講座は学習形態として拘束力や強制力をもっていない。例えば、雨が降る日は欠席者が多い、というようなことも起こりうる。大学サークルや個人教授所ではあまり見られない天候によって受講者数変動するというような状態は進度差の原因にもなるだろう。この点の解決はクラブ講座が抱える一つの課題といえる。

## 4) たのしい大正琴 (琴伝流)

公民館の音楽クラブ講座が学習形態として拘束力や強制力をもっていないことに起因する問題がこの講座でも見られた。観察日は文化祭後第一回目の練

習であったので、出席者が少なかったのである。観察した講座では初めての曲を2曲扱っていた。

#### 5) かんたん詩吟健康クラブ

この講座では、漢詩の意味や作者についての講義もあったので、文学についての知識も増やすことができ、より視野を拡大することができる。総合学習的な講座である。

#### 6) コール・ココ

公民館の音楽講座が抱える施設面の問題点がこの講座の観察で浮上した。それは防音である。合唱では、他声部を聞くことが重要である。しかし、音楽活動を目的としていない公民館に防音設備は無い。内から出る音も外から入る音も防ぎようがない。特に、終了時間近くになると、隣の教室で片付ける音が壁を通して聞こえてくる。アカペラの練習では他パートの音を聞くことは困難な状態であった。

また、外に音が響かないように窓を閉め切って練習するために室温が高く、換気の問題もある。音楽学習に関しては公民館の設備の整備が課題である。

#### 7) 四季をうたう会

混声合唱では理想的な男女比にいかにか近づくことができるかが、基本的な問題となる。一般に生涯学習参加者には女性が多く、男女の比率に偏りが見られる。混声合唱ではこの問題の克服が重要である。女性が男声パートを肩替わりすることも一つの工夫ではある。しかし、この方法では理想的な響きに近づきたい。

また、合唱の講座でも初心者に対する配慮が必要とされる。経験者と初心者双方が満足していく講座作りのためには、レパートリーや練習方法の工夫が必

要とされる。

#### 8) カラオケ歌謡教室虹の会

他の音楽クラブ講座から見たこの講座の特徴は「ふれあいの場」である。講座の冒頭で受講者が一人ずつ話しをする機会が設定され、全員が和気あいあいと話している。生涯学習の場は、学習とともに受講者同士や講師とのふれあいの場であることをこの講座は実証していた。

カラオケは趣味という要素が強い。しかし、新曲の練習も歌いこみもどちらも音楽学習である。受講者は新曲を練習した上で、家に帰り2週間練習をし、歌いこみで学習成果を皆の前で披露するという学習システムを取り入れている。このシステムによって、受講者の音楽の知識と技能をより深めることができると考えられる。

### IV. 公民館における音楽学習参加者の傾向

#### —大学サークルと個人教授所受講者と比較して—

公民館における音楽学習参加者の特質を明らかにするために、公民館、大学、個人教授所（習い事）の音楽クラブ、サークルを対象に、講座や入会動機について意識調査を行う。

#### 1. 調査方法と結果の整理

- (1) 調査方法：質問用紙による。
- (2) 質問内容：活動内容、入会動機、クラブに入ってからよかった点・困った点、継続の意志、過去の音楽経験、等々。
- (3) 調査対象：岡山市立京山公民館の音楽クラブ講座7団体、岡山大学校友会公認の音楽サークル4団体、個人教授所1団体に所属する総計185名。対象者の種別内訳を表4に記す。

表4 アンケート 回答者の内訳 (人)

	日本音楽	西洋音楽	折衷音楽	歌 唱	合計
京山公民館	輝洋秀会 8	オカリナクラブ 12	たのしい大正琴 7	コール・ココ 18	86
	箏曲クラブ 12			カラオケ歌謡教室虹の会 6	
				かんたん健康詩吟クラブ 5	
岡大サークル	邦楽部 24	JAZZ 研究会 17		グリークラブ 25	89
				コール・ロータス 23	
個人教授所	箏曲三上社美峰会 28				28
合 計	72	29	7	77	203

2. 調査結果と考察—学習形態および音楽ジャンルの視点から—

視点1 男女比について

図12は学習形態別の男女比を示したものである。公民館では女性が男性に比べてかなり人数が多い。女声合唱の「コール・ココ」は別として、各講座の男性数は少なく、「箏曲クラブ」「たのしい大正琴」に関しては、観察時には男性は皆無であった。

個人教授所では男性は皆無である。しかし、最近では少子化や習い事ブームの影響を受け、中高年や男性をターゲットとした文化教室も増えている。手ぶらで通えるよう楽器を無料レンタルするなど、中高年男性にも通いやすい環境を整えた企業の音楽教室も存在する。個人教授所でもその特徴を生かした工夫がなされれば、今後男性の増加が見られるのではないだろうか。

公民館や個人教授所に比べて男女比がほぼ同数となっているのは大学サークルである。しかし、大学サークルの中でもジャンルによって男女比が異なっており、サークル別に見ると男女の人数がほぼ同数になるのは「JAZZ研究会」だけである。

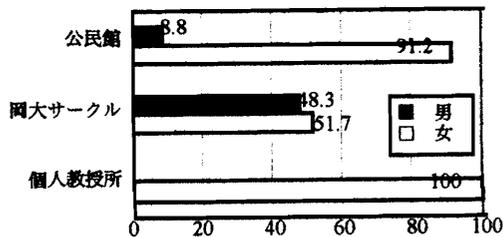


図12 男女比 (%)

視点2 受講者の年齢と音楽の継続年数

大学サークルは全員大学生で、年齢調査を他の学習機関と同等に扱うことはできない。そこで、大学サークルを除き、公民館、個人教授所だけで比較する。

図13は受講者年齢を示したものである。公民館の音楽クラブ講座では10代、20代の受講者はおらず、30代から80代の人が講座を受講している。特に50代から70代で大半が占められていることが分かる。個人教授所では、各年齢層の人が普くなく参加していることが図からみてとれる。特に10代から30代までの若い

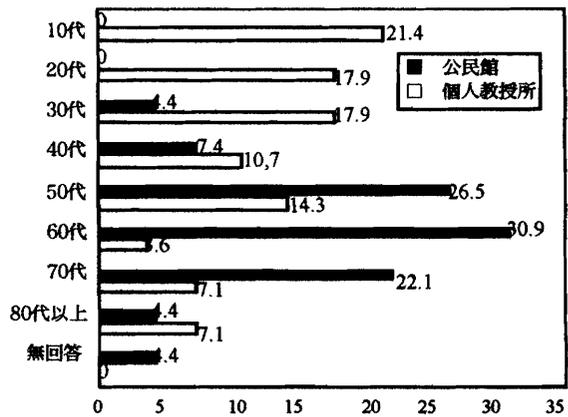


図13 受講者の年齢 (%)

年齢の人が多く所属していることが特徴である。

図14は学習形態別に見たその音楽の継続年数を示したものである。公民館と個人教授所のどちらにおいても10年前後で谷が見られ、1年間から8年間続けている人と13年以上続けている人が多くなっている。長い方では、特に個人教授所で21年以上続けている人の比率が全体の中で最も多く、継続率が高いこと注目される。図13と合わせて考えると、個人教授所は若い頃から習う人が多く、継続率も高い。20代や30代の人々が3歳くらいから習っていて継続年数が10年、20年という人が多く見られる。

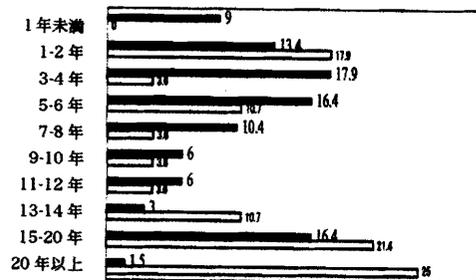


図14 継続年数 (%)

視点3 入会動機

入会動機で最も多いのは「その音楽、楽器に興味があった」であり、各学習形態ともに過半数を超えている(図15)。次に多いのは全体から見ると「演奏を実際に聞いて自分もやってみたいと思った」であり、学習形態別に見てもそれぞれ高い比率を占めている。それぞれの学習形態ごとに発表の機会があり、それを見て、興味をもって始める人が多いことがわかる。公民館ではジャンル別の発表会のほかに、年に1度文化祭がある。大学サークルでは4月に新入生歓迎の演奏会が行われる。個人教授所では年に1度以上の発表会が開催されている。これらは受講者にとって発表の機会

であると同時に新規参加者を招き入れる重要な機会になっていることがわかる。

これ以外の項目では学習形態によって比率や状況が異なっている。まず、公民館では「演奏を実際に聞いて自分もやってみたいと思った」「友達、知人に誘われた」がほぼ同数である。公民館では近所の同年代の友達同士でクラブに参加していることが多い。大学サークルでは「演奏を実際に聞いて自分もやってみたいと思った」の他に「新聞、テレビ、チラシなどを見て」「友だち、知人に誘われた」が多い。前者は、大学入学時に配られるチラシの有効性、後者は友人関係の重要性を示唆している。個人教授所についても、「家族に勧められた」が高い比率である。個人教授所の場合、小さな頃から入会して長年継続している人が多いというため、他のグループとは異なった傾向を示している。

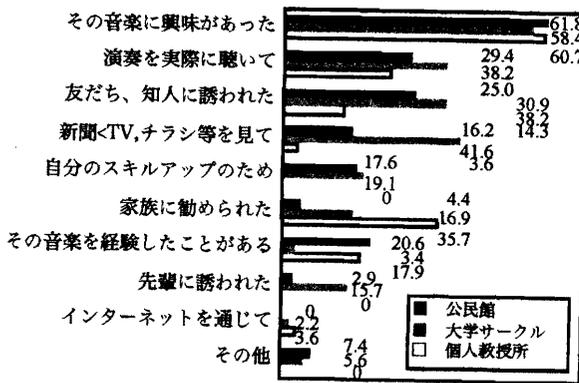


図 15 入会動機 (%)

視点4 よかったこと

この項目については全体的に見て、「楽しい時間を過ごしている」「新しい交友関係ができた」「充実感を得ることができる」が多い(図 16)。3つの学習形態で共通して高い比率を示しているのは「楽しい時間を過ごしている」であり、他の2項目は学習形態によって捉え方が若干異なっている。

公民館で過半数を超えているのが「楽しい時間を過ごしている」「新しい交友関係ができた」「趣味ができた」の3項目であり、全体として高かった「充実感を得ることができた」が比較的少ない。原因として当該講座へ入会目的との関係が考えられる。つまり、公民館での受講者はその目的が活動自体にない場合が多いのではないだろうか。言い換えれば公民館では「楽しい時間」「友だち作り」「趣味」の要素が強いように思われる。

大学サークルで過半数を超えているのが「楽しい時

間を過ごしている」「新しい交友関係ができた」「充実感を得ることができる」「音楽知識が増えた」の4項目である。これらの中でも「新しい交友関係ができた」を9割の人が選択している。新入生にとって入学時は知らない人ばかりである。そのような環境の中で友だちとの出会いの場として大学サークルが大きな役割を果たしていることがこのグラフからよくわかる。また、「音楽知識が増えた」も高い。大学サークルは「学習」意識が高いといえる。一方、他の学習形態に比べて高い比率を示したのが「役割・行動に責任がもてる」「会を運営できる」である。大学サークルは自分たちで企画や運営を行っており、自治組織という意識が他の学習形態に比べ高いと考えられる。大学サークルの特徴として挙げることができるだろう。

個人教授所で過半数を超えているのは「楽しい時間を過ごしている」「新しい交友関係ができた」「充実感を得ることができる」「音楽知識が増えた」「趣味ができた」の5項目である。「充実感を得ることができる」が最も高い比率をしめた背景に頻繁な演奏会が考えられる。曲を完成させたり、演奏会に出たりすることによって充実感を得ることができるのである。本調査で対象とした個人教授所では年に5回以上演奏会で演奏を行なっている。そのため達成感を得る人が多いと考えられる。また、「音楽知識が増えた」の比率も高かった。個人教授所の特性上お金を払って学習するので、大学サークルと同じく「学習」という意識が高く、充実感を得られるのだろう。

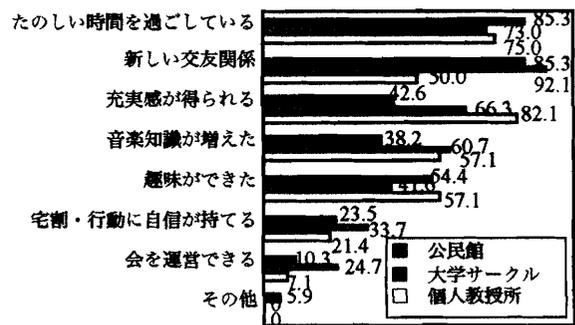


図 16 クラブに入ってよかったこと (%)

視点5 困ったこと

クラブに入って困ったことについては、公民館と個人教授所は「特になし」と答えた人が6割を超えていた(図 17)。公民館の場合、「特になし」以外の項目は若干名しか選択していない。その中で一番多く選択されていたのが「練習場所を確保できない」という項目

である。公民館は誰でも利用できる施設なので、多くのクラブ講座が活動している。そのことから、決められた時間はその場所を利用できる一方で、決められた時間にしか利用することができない。クラブ講座によっては、その時間では練習時間が足りず、もっと練習したいという人もいる。しかし、公民館以外で練習場所を確保することが難しい状況であることがわかる。

個人教授所では、「特にない」と答えている回答者が多いものの、「お金がかかる」を選択した回答者も多かった。一方、「練習場所を確保できない」「人間関係」「楽器が足りない」という項目は皆無である。他の学習形態に比べて、練習場所は講師や自分で確保でき、楽器も購入や借用によって確保されている。

大学サークルでは、「特にない」と答えた回答者が少数であることで際立っている。特に「お金がかかる」「時間が拘束される」と答えた回答者は6割を超えている。大学サークルは自治組織であり、活動費用等は自分たちで賄わねばならず、金銭面でかなりの負担がかかっていることが反映されている。また、「時間が拘束される」が多かったのは、他の2つの学習形態に比べ、全員で活動する機会が多いことを表している。先輩後輩関係による拘束力も含めて大学サークル特有の問題といえよう。

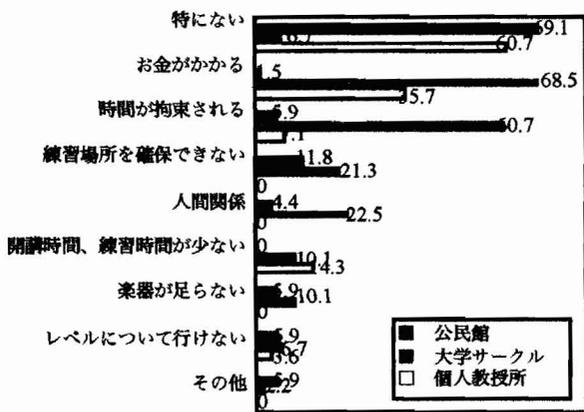


図 17 クラブに入って困ったこと (%)

#### 視点6 継続の意思

継続の意思については全ての学習形態で継続の意思が強い(図 18)。

公民館や個人教授所では、「はい」と答えた人が9割を超えている。公民館や個人教授所では期間は無制限である。止めようという気持ちがあれば、その時点で自分の意志によって止めることができる。とはいうものの、中には継続の意志がない受講者も含まれている

ことがわかった。

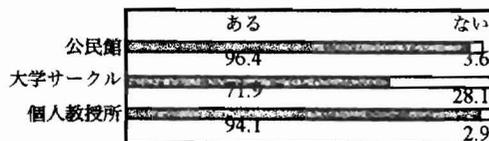


図 18 継続の意志 (%)

3種の学習形態を比較すると大学サークルにおける継続の意思が他の学習形態に比べ低い。そこで、大学サークルの音楽ジャンルごとに細かく見ていきたい。

「JAZZ 研究会」では「いいえ」と答えた回答者は皆無であった。「邦楽部」と「グリークラブ」では「はい」と答えた回答者が大半を占めた。それに比べ「コール・ロータス」では半数の回答者が「いいえ」と答えていた。背景には男性はなかなか生涯音楽学習に参加しにくいという現在の日本社会の状況があると考えられる。

図 19 は大学サークルにおいて、卒業後も継続したいといった回答者のみに、継続する場合の学習形態について聞いた結果である。いずれのサークルでも「独学」という学習形態を挙げた回答者が多かった。ここで、注目したいのは「公民館」と「その他」という学習形態についての認識である。

公民館という学習形態を選択した回答者は「邦楽部」で若干名であり、「JAZZ 研究会」「グリークラブ」「コール・ロータス」では皆無であった。吹奏楽やジャズは岡山市立公民館で講座が開講されていないことに対して問題があるだろう。

また、岡山市立公民館で講座が開講されている日本音楽やコーラスに関しても選択している回答者が少ないことが問題として浮かび上がる。大学生は公民館での活動として音楽クラブ講座を多く開講していることをまだまだ知らないのではないだろうか。継続の意思や学習ニーズがあることを公民館側も知る必要があるだろう。同時に、若い人に対して公民館の音楽活動についてこれまで以上にアピールしていく必要がある。

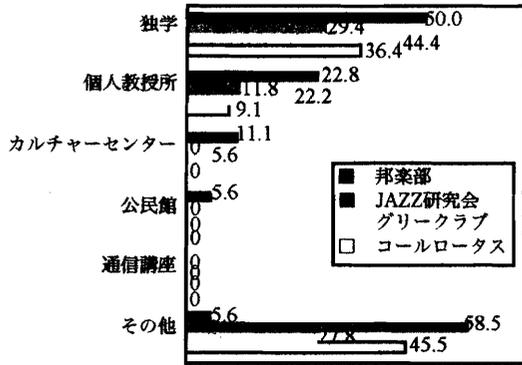


図 19 大学サークルごとにみた継続するときの学習形態 (%)

「その他」の回答に関しては「JAZZ 研究会」「コール・ロータス」ではこの項目を選択した回答者が最も多い。「JAZZ 研究会」では「社会人バンドに所属する」、「グリークラブ」と「コール・ロータス」では「一般（民間、市町村）の団体に所属する」が多い。公民館ではなく、社会団体に所属し、合奏や合唱を楽しみたいという人が多いようである。

視点 7 過去の音楽活動とその音楽形態

公民館や大学サークルで現在音楽活動をしている人には過去に音楽活動を経験している人が多い（図 20）。個人教授所では、過去に音楽活動を経験している人が半数であった。

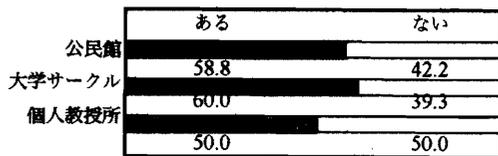


図 20 過去の音楽活動経験の有無 (%)

図 21 は過去の音楽活動の経験があると答えた回答者のみを対象として、その学習形態について聞いた結果である。全体としては「習い事」や「中学校、高等学校での部活動」と答えた回答者が多い。「公民館」を選択した回答者は現在の公民館の受講生に限られている。このことは公民館の利用者がきわめて限られていることを意味している。公民館は全ての人に開放された学習空間であり、講座も音楽ジャンルも豊富に備えられており、公共の教育機関なので、費用もあまりかからない。「公民館」という学習形態の広報の必要性が感じられる。

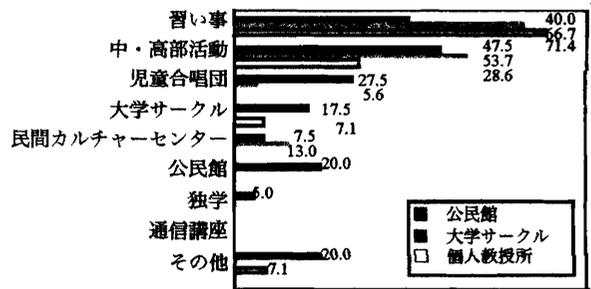


図 21 過去の音楽活動の学習形態

VI おわりに

生涯学習とは「いつでも・どこでも・誰でも」学習することができる学習スタイルである。参加者が皆平等に満足し、楽しんで自主的に学習を行うことが生涯学習の理想であり、目ざすべきものであると考えられる。そのため、生涯学習施設のスタッフも、講師も学習者も全ての人々が様々な工夫をして、理想の学習スタイルを追求していく必要があると考える。キーワードは「全員が満足するための講座づくり」である。

岡山市の公民館は中学区ごとに設備され、広く市民に開放されている。利用時間はたとえば京山公民館の場合、平日では9時半から21時である。ところが、大学卒業後の音楽学習の見通しに関して継続の意志を「独学」で実現しようとする回答が圧倒的に多かったことから、公民館の存在が若い世代に知られていないことが判明した。事実、公民館では小学校高学年以上の子どもたちや大学生などの学生の姿をみることは少なかった。これらのことから、学習の場としての公民館の存在は若い世代にあまり認識されていないといえよう。様々な年代の人々が集まり、学習することは生涯学習の根源である。そのような状態をつくるため、外に向かって公民館に関する情報の充実とさらなる発信が望まれる。

本研究では岡山市を取り上げて考察してきた。今後は岡山県内の別の市や他県の市町村について調査を広げたい。平成の市町村大合併による生涯学習機関・設備への影響も考えられる。さまざまな視点から検討し、研究を深めていくことが生涯音楽学習を進める上での課題と考えている。

【注】

- 1) 鈴木真理、守井典子編『生涯学習社会における社会教育 6 生涯学習の計画・施設論』学文社、2003 p. 64
- 2) 岡山市立各公民館のパンフレットおよび <http://www.city.okayama.okayama.jp> 他各公民館の URL
- 3) 折衷音楽：大正琴は二弦琴にピアノの鍵盤装置を応用した折衷楽器である。レパートリーも日本の民俗音楽、文部唱歌などを含むために「折衷音楽」として分類した。
- 4) 田邊美佳『音楽による生涯学習』平成 14 年度岡山大学大学院教育学研究科音楽教育専攻修士論文、2003
- 5) 岡山市立京山公民館：岡山市伊島町 2 丁目 9-38  
1994 年建設。岡山市立伊島図書館と併設されており、美術工芸室、研修室、茶室、実技室、なかよしのへや、図書コーナー、料理講座室および講座室 2 室が設備されている。

---

Title : On Life-long Music Learning in Okayama City: Focused on Music Learning in Public Community Centers

NIIYA, Akiko (Tombow.),  
OKU, Shinobu (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract : In Okayama City, various life-long learning facilities have been founded and many people are learning there. The idealistic concept of life-long learning is said to make all people to be satisfied at learning. In this paper, we focused on public community center. We examined music learning in community centers through interviews and questionnaires. The results are compared with other learning, i.e. studio music learning and pedantic music circles in a university.

The results show that community centers are not popular among young generation. To develop life-long music learning more information about community center is necessary.

Keywords: life-long music education, Okayama city, community center, private music institution, music circle in university

---

